

## 漢訳〈無量寿経〉の思想構造

——特に三毒五悪段を巡って——

山田 恵文

中国で翻訳された漢訳〈無量寿経〉は五本現存しているが、その内、三毒五悪段を有するのは、いわゆる初期無量寿経に属する『大阿弥陀経』と『平等覚経』、並びに後期無量寿経に属する『大無量寿経』の二本である。

これ以降に翻訳された『如来会』『莊嚴経』には存在せず、また現存するサンスクリット本(十二世紀刊本)、チベット訳(九世紀)に同じく存在しないことから、この段の成立については近代以降、多くの先学達に種々論じられてきた。

75 今回は、この三毒五悪段の成立問題がどのように論じ

られてきたのかを概観することを通して、漢訳〈無量寿経〉の思想構造、特に初期無量寿経に属する『大阿弥陀経』と、後期無量寿経に属する『大無量寿経』との相違について論じてみたい。

先述の如く、三毒五悪段の成立については疑義があり、中国撰述説、インド撰述説の両説が唱えられてきた。中国撰述説は、大正八年(一九一九)の荻原雲來氏を皮切りに、津田左右吉、望月信亨、藤田宏達などの諸氏を代表として論じられてきた説である。三毒五悪段の語句と内容は、儒家、道家、道教などの中国思想に満ちており、翻訳の際に付加されたものと見当づけられ、時代が下り梵文原典に忠実な翻訳が求められる中で削除されていったと推察する。

一方、インド撰述説の立場は、用語の特色を根拠に論じるのは表層的であると批判し、何故この經典において三毒五悪段があるのかを、内容上から判断すべきであるという視点に立っている。そして、最古の漢訳である『大阿弥陀経』では、経の本論と経の後半に位置する三毒五悪段の内容には矛盾がなく主旨が一貫していると述

べて、梵文原典において存在していたであろうと推定する。その代表的な論者が、池本重臣、藪田香勲、松原祐善、梶山雄一などの諸氏である。

この議論において注意しなければならないのは、両者が問題としているのは、最古の漢訳である『大阿弥陀經』に三毒五惡段があったのかどうかという点であり、三番目の漢訳である『大無量壽經』については、兩説とも一致した見解を持つてゐることである。すなわち「魏訳無量壽經はそれ自らの中に、全く相矛盾する二つの教義を説いている」(池本)、「不用意に挿入された」(藤田)と論じられるように、『大無量壽經』の三毒五惡段は、本論とは別に中国で付加されたものであると結論づけられている。つまり『大阿弥陀經』と『平等覺經』にすでに存在していた三毒五惡段を整文化した上で、翻訳の際に付加したのが、『大無量壽經』の三毒五惡段であると言っているのである。

この一連の議論を通して見えてくるのが、『大阿弥陀經』と『大無量壽經』は同じ漢訳(無量壽經)でありつつ、思想内容に差異があることを示している点である。

一方では、本論とこの段の主旨は一貫していると言い、一方では矛盾しているというのは如何なることなのか。

三毒五惡段の内容をまず確かめるならば、そこには人間が自らの業報によつて生死流転している娑婆世界の真相が説かれている。その際に「三世に渡る因果応報」が繰り返し述べられていることには、特に注意すべきであろう。善因善果・悪因悪果の法則が必然であり、その法則に三世に渡つて縛られて流転する人間の姿が説かれているのである。しかし、この法則が必然であるという前提を立てば、一方ではもちろん自らの悪業によつて生死流転することを述べる道理となるが、一方では自らの善業によつて娑婆世界から抜け出すための道理ともなり得る。よつて、この段の主旨は因果応報の法則を信じて、自ら進んで善を修めるべきであるという「廢惡修善」の勧めにあると読み取ること出来る。

そして、この段を有する『大阿弥陀經』の特色は、結論から言えば、自力修善を勧める傾向が色濃く残る処にあると言える。本論を見通せば「作善」「修善」を勧める教説が随所に見える。この点が廢惡修善を主旨とする

三毒五惡段と教説上矛盾しないという論拠になる。

例えば、『大阿弥陀經』が他の異訳の經典と大きく異なる点は、三輩生と本願文(五願・六願・七願)がよく整っており一致していることである。三輩生はどの(無量壽經)においても存在するが、本願文と明確に対応しているのは『大阿弥陀經』のみである。このことから『大阿弥陀經』成立時における浄土思想において、最も中心となる教説は三輩生であったと見当づけることが出来る。三輩生とは、修めた善行によって浄土への生まれ方に区別があることを説く教説である。「上輩(一輩)・「中輩」・「下輩(三輩)」とあるが、特に「家を捨て沙門となり六波羅蜜を實踐する者」の往生を述べる「上輩」を勧めるのが、『大阿弥陀經』のねらいであると思われる。そして、出家が出来ない者は在家において布施や造寺起塔などの宗教的善行を行う者(中輩)となり、それもかなわぬ者は斎戒清浄にして一心に浄土を願生する者(下輩)となつて往生することを勧める。

更に(無量壽經)の思想的な展開を考察する上で見逃せないことは、この中輩並びに下輩において、辺地への

往生が説かれている点である。中輩・下輩の者は浄土には生まれるのであるが、因果応報の法則を疑つて自力修善を怠るために、浄土の辺地の「七宝城中」にとどまつてしまい、五百年間そこから出ることが出来ないと言う。ここに上輩者との区別が為されている。

『大阿弥陀經』は、善惡の因果応報を説く意図を基本的に有しており、そのために人間の課題はこの道理を信じられず、自力修善を怠つてしまうところにあると見てゐる。この点に初期無量壽經の特色が窺えるのである。

そして、この主旨が劇的に変化するのが、『大無量壽經』以降の後期無量壽經なのである。

先述の如く、『大無量壽經』では三毒五惡段は付加されていると見なされるが、その根拠は教説が矛盾しているからであった。『大無量壽經』の本論の主旨は、本願「他力」の往生であり、一方で三毒五惡段は「自力」での廢惡修善を説くことになるからである。では、なぜこの段は付加されたのか。また本經におけるこの段の意義をどのように考えていくかという問題が、今後の重要な研究課題となるであろう。多少この問題について言及す

るならば、『大無量寿経』における三毒五悪段は、本經の主旨から言えば、当然、本願力によって救われるべき世界を説く教説と位置づけられる。つまり『大無量寿経』にあつては廢惡修善が主題とはなり得ず、むしろどうあつても自力では逃れがたい業道流轉の相を描くところにこの段の存在意義がある。そして、業道の絆をおのずから断ち切っていくことが、浄土の救いであることを明確に論じる役割を果たしているのが、『大無量寿経』における三毒五悪段ではないかと考えたい。

そして、初期無量寿経においては中輩・下輩の中で説かれていた「辺地への往生」が整理されて、『大無量寿経』では智慧段として独立し誕生していることが重要である。『大無量寿経』では、人間の課題は「仏智（本願他力）を疑う」ことにあると新たに見出されているのである。本願他力の思想がより明確になる中で、人間の課題が信仰問題として捉えられるようになった。ここに初期無量寿経からの思想的展開が見られる。仏智を疑うとは、業道の絆を断ち切る本願力を疑うということであり、これは、どこまでも自らの善根功德を当てにする人間の

自力心の問題に光が当てられていることを意味している。初期無量寿経では、因果応報を信じて自力での作善を勧める傾向が強いのだが、『大無量寿経』に至つては、むしろその心を問題と見なし批判していくのである。ではなぜ、このような変化が起きたのか。浄土思想の成立から中国における翻訳時の思想的状況まで含めて、幅広く考察すべき課題であると考ええる。

(本学専任講師 真宗学)

〈キーワード〉無量寿経、因果応報、自力・他力

#### 〔編集委員会付記〕

山田恵文本学講師の他の発表者及び発表題目は次のとおりである。

ツォンカバにおける概念的認識の構造 福田洋一 本学教授

〈底〉から〈的〉への交代状況からわかること

渡部 洋本学准教授

言語発達における声と意味

矢野のり子 本学教授

以上の発表内容は『天谷学報』第八十九卷第一号に論文として掲載予定である。